

(仮称)宮前区の「希望のシナリオ」 実現プロジェクト 進行中！



宮前区役所企画課 課長補佐 大木 かほ里

1 「はじめの一步」の模索

(1) まずはヒアリングから

本市が進めるコミュニティ施策の目的は、「希望のシナリオ」の実現、すなわち、多様なつながりや居場所があり、幸福度が高く、誰もが認められる社会の実現である。その進め方は、「各区一律に同じやり方で進めるのではない」とされており、極めて自由度が高い。

区民の活動が盛んと言われている宮前区では、どんな活動が行われているのか、また、活動を支援するどんな仕組みや制度があるのか、まずは企画課の職員が手分けして区民や職員から話を聞くことにした。

平成30(2018)年の夏から少しずつ調べていくうちに、区民も職員も、自分の関わる分野とその周辺の情報にはよく知っているが、全体像を知る人はいないことに気が付いた。何度もヒアリングを行い、さまざまな情報を集めようと試みたが、直接話を聞いていないヒアリングの記録を読んでも、熱意や微妙なニュアンスは共有しきれないことも分かった。さらに、どんなに頑張っても区内の全ての活動情報を網羅的に調べ上げるには無理があり、不十分なデータでは行政として公開しにくいこともあって、このままヒアリングを続けることに疑問を感じ始めていた。

(2) 区民とともに「活動相関図」を創る試みへ

それでも、宮前区らしい「希望のシナリオ」の実現には、区内でどのような活動が行われているのか把握することは欠かせない。

区内では、全国的にも知られる認知症カフェ、駅前や公園で開催されるマルシェ、企業と地域の連携による市営住宅集会所における出張販売会など、新たなコミュニティづくりに向けた動きが始まっており、まち

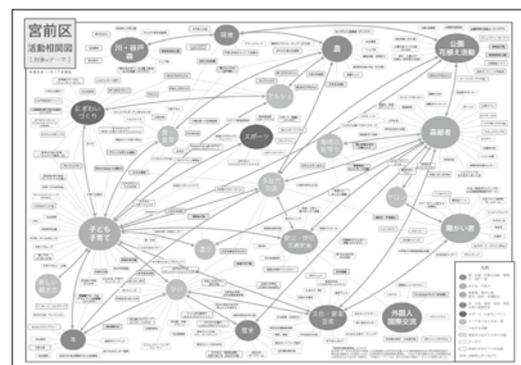
づくり協議会の活動も活発で、町内会・自治会は地域の安全・安心を支えるさまざまな活動を行っているなど、断片的な情報はつかんでいたが、個々の具体的な活動の内容や相関関係は分からず、全体像を示すことはできなかった。

それなら、ヒアリングに代えて、関心のある人が集まって学び合うスタイルにしてはどうかと考え、区民や職員それぞれが知っている区内の活動情報を出し、どうつながっているか学び合い、さらに、実験的に活動の相関関係を大きな図で描いてみることにした。

事前勉強会を2回開催して、参加者が知っているさまざまな活動の情報をワークシートに書き出してもらい、後日、その内容を見ながら、「子ども・子育て」「高齢者」「公園・花植え活動」「農」「多世代交流」「にぎわいづくり」といったテーマごとに活動を分類。「情報発信」や「中間支援」といった網羅的な活動は別にまとめて、2枚の活動相関図ができた。

活動相関図は、「区民の皆さまの手で更新中」と付記して、サグラダ・ファミリアのように未完成の状態で開催し、足りない部分や誤っている部分があれば、加筆修正しながら、精度を上げていった。

区民と職員が学び合いながら、相関図の作成プロセスを共有することにより、次の効果があった。



活動相関図

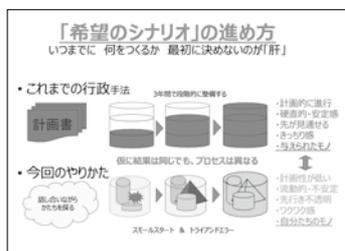
【学び合いの効果】

- ①関わる区民と職員が同じ土俵で全体像を把握し、共通認識を持てるようになる
- ②成果物が未完成でも、公開しながら精度を上げられる
- ③自分が出す情報が成果物に組み込まれるため、この取り組みが「自分ゴト」になり、継続的に関わりやすくなる

**2 「希望のシナリオ」
実現プロジェクトの推進**

(1)先が見えにくい取り組みへの共感を育てる

区民とともにつくるプロセスが最も大切、というこれまででない進め方を区職員に分かってもらおうと、平成31(2019)年1月に30分の職員研修を同一内容で複数回実施するとともに、区民向けのワークショップの冒頭で、進め方を繰り返し説明するようにした。



今回の進め方の肝は「いつまでに 何をつくるか 最初に決めない」ことである。仮に結果は同じでも、あらかじめ定めた計画に従って進めるのとは全く異なる。関係者が学び合った結果として初めて浮かび上がる全体像を共有し、最適な次の一步を考えるため、始めたばかりの段階でゴールが見通せるはずもない。この進め方に対する区民の受け止めは、次のとおりだった。

【キックオフミーティング アンケート結果】

- どうなるのかよく分からないことも含め、みんなと一緒に創るプロセスもおもしろい 17人(57%)
 - 区から方向性が具体的に示されていないので、どうなっていくのか不安だ 2人(7%)
- (平成31(2019)年3月21日実施 参加者47人中30人回答)

(2)机上での情報収集から、活動現場の体験へ

平成31(2019)年3月のキックオフミーティングで、活動相関図をお披露目した。自分が出した情報が活動相関図に載っているのを見つけると、参加者は笑顔になったが、期待に応える次の企画を考えるのは難しかった。

試行錯誤の結果、活動相関図にある活動を地図に落とし「活動相関図マップ版」を作り、現地ツアーの企画をする「みやまえ取り組み隊」ミーティングを7月に行うことにした。壁に貼った拡大マップに、見に来

てほしい活動にはピンクの桜のシール、おすすめの活動にはピンクの丸いシール、見てみたい活動には青の丸いシールを貼ってもらい、5つのエリアに区切り、班に分かれて、何を聞きたいかを話し合った。



ワークショップの様子

ワークショップで挙げられた訪問先は市民活動が多かったため、町内

会・自治会の活動や福祉活動も体験できるよう、他課の協力を得て行き先に追加し、令和元(2019)年8月末に参加者を募集。企画課の全職員が分担してコース担当となり、9月から10月に全6コースを実施した。

区内34の活動を巡るツアーの募集人数は計90人。区民等のべ60人、職員のべ43人が参加し、訪問先関係者も含めると154人(実数116人)が関わった。7月のワークショップ出席者の参加率は、94.1%だった。

【現地ツアーの一例(野川・馬絹コース)】

- 8:00 西野川小学校(西野川小あいさつ運動)
- 10:00 すずの家(日本の地域包括ケアシステムのモデル)
- 11:45 ゆうたんのほったた(人をつなぐシフォンケーキ)
- 14:00 生活支援センターきまっしー(障がい者支援)
- 16:00 TIDA'S HOUSE(空き家活用の交流拠点)

さらに、予期せぬ効果が現れた。7月に会った区民と地域包括支援センターの職員が連携し、11月に「エンジョイ・シニアの大文化祭」というイベントが実現した。一人の思いが今回の出会いで共感を得て、思いもよらない展開を起こす市民創発が起きたのだ。

3 今後の展開、そして、大切にしたいこと

11~12月の現地ツアー報告会では、見聞きした34の活動の強みが書かれた「資源カード」を使い、「このノウハウを使って、ここで、こんなことをしたい」というような具体的な企画案を一人ずつ作って、協力者を募るワークショップを実施。35の企画が生まれた。

令和2(2020)年3月には、本プロジェクトを契機に始まった活動や動き出そうとしている企画が加速するような取り組みを計画している。

今後も、区民と職員が「ともに学び合い、現場を見て、考える」を大切に、共通認識を育み、人の輪を広げながら、一歩ずつ進めていけたらと考えている。